

Der Arzt der Sobeide [ゾベイデの医者]

プロローグと2幕からなる喜歌劇。

台本：Fritz Zoref ・ Opus 4 ・ 1917

編成	独唱： 6 sop,4 alt,3 ten,2 bar,2 bass; 混声合唱; 児童合唱; 管弦楽： 3(picc),2(cor),2(D-cl,bcl),2(cbn); 4,3,3,1; ハープ; ティンパニ; 打楽器; 弦; 4場
----	---

演奏時間	一晩を要する全曲
------	----------

出版社	Universal Edition (1919)
-----	--------------------------

入手方法	総譜とパート譜はレンタル可能
------	----------------

初演	Breslau 2/11/1919 (cond.Prüwer; prod.Runge)
----	---

作品について	「ここには職人芸の達人を示すあらゆる長所が集まっている。豊かな旋律の着想が全曲に浸透し、抒情的な場面を自然に際立たせ、高めている。それを運ぶ和声の自由さは大胆でありながら、全く無理がない。停滞を許さない、生气を与えるリズム感が特に巧みに発達している。各声部、とりわけ歌いやすい声楽の線の自然な流れの背後には、容易そうに見せる成熟した技術上の芸術が隠されている…。」 [Georg Jensch : Volkswacht (1919)]
--------	--

詳しい情報

Der Arzt de Sobeide [Sobeideの医師]

Hans Gál

前奏と2幕からなる喜歌劇。台本：Fritz Zoref。

1919年、ウィーンのUniversal Editionより作品4として出版。

第一次世界大戦で従軍し、カルパティア山脈で鉄道建設に携わっていた
1918年に完成。

初演：Breslau、1919年11月2日。指揮：Julius Prüwer。演出：Runge。

舞台：

前奏：古いGranadaの城門近くのにぎやかな広場。

第1幕：Don Pedroの家。

第2幕第1場：旧市街の中庭。

第2幕第2場：ムーア人の天幕内のハレムとその周辺。

時代：

16世紀半ば。

登場人物：

Juan Sanchez de la Mancha (テノール)

Annita、彼の婚約者 (ソプラノ)

Don Pedro、医師、Annitaの父 (バリトン)

Paquita、Annitaの侍女 (ソプラノ)

Don Miguel de Zuelos、冒険好きの郷土 (テノール)

Lopez、彼の従者 (バス)

Jacinto、Pedroに仕える理髪外科医 (バリトン)

Sobeide (ソプラノ)

Zuleima、Sobeideの付き添い (ソプラノ)

Fatima、Sobeideの付き添い (アルト)

Ali、宦官 (ソプラノ)

Nahena、いかさま薬売り (アルト)

若い洒落者 (テノール)

もう一人の洒落者、彼の友人 (バス)

果物売りの女 (アルト)

街の子ども1 (ソプラノ)

街の子ども2 (アルト)

子ども、市民、ハレムの女たち、奴隷、宦官

楽器編成：

フルート3（第3奏者はピッコロ持替え）

オーボエ2（第2奏者はオーボエ・ダモーレ持替え）

変口調・イ調クラリネット2（第1奏者はニ調クラリネット、第2奏者はバス・クラリネット持替え）

ファゴット2（第2奏者はコントラファゴット持替え）

ホルン4

トランペット3

バス・チューバ

ハーブ

ティンパニ

打楽器

弦楽

舞台上：オルガンまたはハルモニウム

あらすじ：

16世紀スペインのGranada、ムーア人とキリスト教徒の冒険騎士がいる色彩豊かな異国情緒の世界で、二つの恋物語に陰謀、冒険、人違いが絡む。千一夜物語の詩的雰囲気をはるかに帯びる剣と策略の劇であり、「Così」と「Don Giovanni」を思わせる典型的な喜劇場面を持つ、滑稽な恋愛喜劇である。第2幕のフィナーレで頂点に達し、病むムーア人奴隷の娘Sobeideを診るため、医師に変装してハレムへ入った冒険騎士Don Miguelとの愛の二重唱から始まる。そこへJuanも医師に化けて到着し、本物の医師Pedroが続く。一切を企てた薬売りNahenaがJuanの婚約者まで連れてきて、彼をさらに窮地に追い込み、混乱は極まる。

音楽的には、恋人たちの恍惚と、敗者たちが自分のものは「間違った薬」だったと皮肉に認める姿を合わせ、合唱付き五重唱・六重唱という大きなアンサンブルを展開できる。

形式的には、対照の強い番号曲が連なり、音楽的な「場面」が絶えず進み交替する。管弦楽は主に伴奏の役割を持つが、比較的長い二つの間奏曲は例外である。これらは、Sobeideが女声合唱と歌うムーア風の恋歌と同じく、人気の演奏会用作品となった。

[Waldstein、1965年、22-3ページ参照]

[この作品をウェブサイトで見ると](#)